

「義兄弟」 ★★★

2010（平成22）年8月30日鑑

賞＜角川映画試写室＞

監督：チャン・フン

イ・ハンギュ（韓国国家情報院要員）／ソン・ガンホ

ソン・ジウォン（北朝鮮工作員）／カン・ドンウォン

影（北朝鮮工作員）／チョン・ググアン

コ・ギョンナム（韓国国家情報院要員）／パク・ヒョクオン

ソン・テスン（北朝鮮工作員）／ユン・フィソク

国家情報院次長／チェ・ジョンウ

チ・ミョンフン（元金正日政治軍事大学教授）／クオン・ポムテク

キム・ソンハク（金正日の従兄弟）／チョン・インギ

ベトナムマフィアのボス／コ・チャンソク

地方警察署係長／パク・スヨン

2010年・韓国映画・116分

配給／エスピーオー

＜こりゃ、ちょっと甘すぎるのでは？＞

平和でノー天気な日本と違って、南北分断の悲劇が60年間も続いている「お隣の国」では、そのテーマを扱った映画は『シュリ』（99年）や『JSA』（00年）など名作ぞろい。その緊迫感、甘ったるい邦画では絶対味わえないものだ。

本作の主演は、『殺人の追憶』（03年）や『グエムル 漢江の怪物』（06年）などで今や韓国を代表する俳優となったソン・ガンホと、『オオカミの誘惑』（04年）や『デュエリスト』（05年）などで人気急上昇した若手のカン・ドンウォン。ソン・ガンホが韓国国家情報院要員のイ・ハンギュ役、カン・ドンウォンが北朝鮮工作員で韓国に潜入しているソン・ジウォン役を演じているうえ、本作は韓国で550万人を動員したというから、こりゃ『シュリ』を上回る緊迫感を味わえることまちがいない！そう期待したが、さて？

序盤で見せる、金正日の従兄弟・キム・ソンハク（チョン・インギ）に対するベテランの北朝鮮工作員「影」（チョン・ググアン）とジウォンそして同じく北朝鮮工作員のソン・テスン（ユン・フィソク）による襲撃劇は緊迫感十分だが、映画中段で長々と展開される「義兄弟」をテーマとしたこの甘さは一体ナニ？『義兄弟』というタイトルにも多少違和感があったが、こりゃちょっと甘すぎるのでは？

＜はぐれ者同士が結びつくのは世の常？＞

今や日本は大学を卒業しても60%しか就職できない状況になっているから、そりゃひどいもの。また、法科大学院を卒業し司法試験に合格しても就職先がないという現状もそりゃひどいもの。そんな状況下では「格差！格差！」と騒がなくても、落ちこぼれやはぐれ者があちこちに出てきても当然だ。

南北分断をテーマとした本作におけるはぐれ者の第1は、事後報告だけで影を逮捕しようとして失敗したハンギュ。ハンギュが上の顔色ばかり見ている国家情報院次長（チェ・ジョンウ）に反発したのはある意味当然だが、組織の一員としては本作にみるハンギュの行動はいかがなもの？

もう1人のはぐれ者は、裏切り者はテスンであるにもかかわらず、裏切りの汚名を着せられたジウォン。ジウォンは妻子を北朝鮮に残しているから、そうなるとジウォンの立場は微妙。元金正日政治軍事大学教授でありながら、今や完全に韓国に取り込まれてしまったチ・ミョンフン（クオン・ポムテク）の例もあるのだから、ジウォンがそのまま「將軍サマ」を裏切ってもいいわけだが、もともと誠実タイプ（？）のジウォンにはそれはできないらしい。

ソンハクの殺害から6年。共にはぐれ者となったそんな2人が偶然出会ったのは、今はしがたい探偵の仕事をしているハンギュが、ベトナム人マフィアのボス（コ・チャンソク）とのトラブルに巻き込まれた時。心やさしいジウォンがボスに捕らえられたハンギュを助けたことによって、以降2人は互いに秘密を抱えながら、互いの距離感を測り会う「義兄弟」になっていくことに・・・。

＜第3楽章のクライマックスは？＞

交響曲は4つの楽章で構成されるのが基本だが、ピアノ協奏曲やバイオリン協奏曲は3つの楽章構成が基本。また、4楽章構成の場合は起承転結という構成がピッタリだが、3楽章構成の場合はおおむね第2楽章は静かな展開となり、第3楽章で一気にクライマックスへという名曲が多い。しかして、3楽章構成からなる本作（？）でも、第2楽章で延々と展開される男同士の「義兄弟ぶり」を挟んで、第3楽章では南北対立の姿がリアルに。

第3楽章がクライマックスになるのは当然だが、そこに登場するキーマンは第1楽章で残忍な仕事ぶりを発揮した影。「南朝鮮」に潜入している北朝鮮工作員は、將軍サマが権力を握る朝鮮労働党の指令に従って動くはず。ところが、スパイながら序列が2ケタ下の影ともなると、「祖国を裏切った奴は当然抹殺すべき」という信念にしたがって行動しているらしい。そんな影のターゲットになったのがミョンフン教授だが、本来その抹殺に協力すべきジウォンがそこでとった行動とは？そして、既に互いの秘密を知り合い、ジウォンに対して義兄弟の域に達しつつあったハンギュがそこでとった行動とは？

本作第3楽章のクライマックスはそんな形で訪れ、何とも意外な結末を迎えるが、さてあなたはそれをどう評価？

＜この甘ったるい結末は、一体ナニ？＞

3楽章構成となる本作では、ラストに付録ともいべきオチがついている。あのクライマックスの闘いで死亡したのは影。3者が対決する中で瀕死の重症を折ったジウォンは、しぶとく生き残った。そして、命懸けでジウォンを助けようとしたハンギュも、傷が癒えるとそれまでのはぐれ者から一躍韓国の英雄になったらしい。

そんな中、ジウォンからハンギュに送られてきたのがイギリスへの航空券だ。別れた妻がイギリス人の男と結婚したため、ハンギュが電話でしか愛する娘と話ができないことを知っている義兄弟のジウォンが、気をきかせてハンギュにイギリス行きの手ケットを送ってきたというわけだ。そうなれば、ハンギュは探偵の仕事をやベトナム人マフィアのボスに任せて、今やビジネスクラスの機上の人に。もっとも、そうなると人はお里が知れるもの。ビジネスクラスともなればアルコールが飲み放題と聞いたハンギュは、早速1番高いウイスキーを注文。すると、そこに後部座席から聞こえてきた声とは？

おしゃれな結末にこだわったのかもしれないが、本作は南北分断の悲劇をシリアスに描くものではなかったの？この甘ったるい結末は、一体ナニ？

2010（平